広島女学院大学総合研究所年報

〔電子版〕

Vol.27

広島女学院大学総合研究所

2023

目　　　次

Ⅰ．　はじめに・・　所長 三木 幹子　(1)

Ⅱ．　2022 年度広島女学院大学学術研究助成【研究概要報告】

◇個人研究◇

[一般]

- 自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究―成長の可視化と促進―・・・・・・　中島 義和　(2)
- 認知機能低下を防ぐ食品栄養素の機能評価システムの構築と病態制御法の探索・・・・　野間隆文　(4)
- Attitudinal Response and Productive Network Knowledge Assessment of using Virtual Reality in a Second Language Acquisition Environment.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Felix David　(6)
- 転写因子の転写活性非依存的な天然変性タンパク(IDP)としての新機能・・・・・・・・・・・・・　土谷　佳弘　(7)
- 角筆文献を活用した授業の構築と教材用マニュアルの作成について・・・・・・・・・・・・・・・・・　柚木　靖史　(9)
- 中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究・・・・・・・・・・　小松明日佳　(10)
- デジタルライブラリーを活用した多読活動による語彙力とリーディングに対する積極性の向上調査研究および促進と可視化・・　大崎　美佳　(11)
- A longitudinal mixed methods study of L2 motivation in a Japanese undergraduate English program: developing intervention strategies and support systems. ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Robert Dormer　(13)

Ⅲ．　2022 年度広島女学院大学学術研究助成【交付一覧】・・・　(17)

Ⅳ．　2022 年度科学研究費助成事業【交付一覧】・・　(18)

Ⅴ．　関係規程等・・・　(19)

Ⅰ．はじめに

所長　三木幹子

2023 年春。3 年間続いた新型コロナウイルスの感染が終息し、世界は日常を取り戻し始めました。本学教員も国内外の現地調査やフィールドワークを制限なく自由に実施できるようになることでしょう。研究者のみなさまが充実した研究活動を行い、素晴らしい研究成果を得られることを期待しております。

2022 年度はまだまだ新型コロナウイルスの影響を受けていた時期でしたが、教員のみなさまは研究を継続し、その成果を発表されています。

2022 年度の広島女学院大学学術研究助成は、新規個人研究一般部門が 8 件、継続 8 件でした。2021 年度の個人研究交付件数が 3 件（内新規 1 件）であったことを考えると、申請件数が増加していることがわかります。これは喜ばしい傾向であると言えます。ただ、学会特別助成は申請がなく、学術図書出版助成は 1 件の申請（承認）がありましたが、申請者都合により辞退となりました。

また、2022 年度の科学研究費助成事業の採択は、継続研究代表者 7 件、新規研究代表者 3 件、継続研究分担者 1 件となりました。研究者のみなさまの積極的な申請に感謝申し上げます。

『広島女学院大学論集』については、2022 年度版（第 70 集）は 4 編の論文を掲載いたしました。これらは 4 学科からの投稿であり。異なる研究領域の論文を掲載できたことは多様性の時代を象徴していると思われます。

2022 年度に顕著な変化が見られたのが、倫理審査委員会への申請です。2021 年度の 9 月の申請が 3 件だったのに対して、2021 年度 3 月は 15 件、2022 年度は 9 月と 3 月合わせて 22 件の申請がありました。このように申請件数が増加したきっかけとして、2021 年度第 6 回 FD 研修会（2022 年 2 月 21 日開催）に於いて、前研究科長より「資料収集・アンケート調査における情報倫理に関する学生指導」というテーマでのプレゼンテーションがあり、倫理審査の対象となる研究とその留意事項についての研修を行ったことが要因ではないかと考えます。これは教員のみなさまの研究倫理への関心が高まったことの証明であり、毎年全教員及び大学院生を対象に実施している、日本学術振興会「研究倫理 e ラーニングコース」の受講の効果であろうと思われます。

総合研究所長として危惧しているのは、教員の研究時間の確保です。ここ数年の間で本学の入試の種類が増え、それに伴い教員の校務分掌も増えました、入試は土日に実施されるため、教員の研究日が削られます。また、2023 年度はオープンキャンパスの回数が増え、さらに 16 回開催されるイブニングオープンキャンパスは平日の夜に実施されます。それにより教員の研究日がそれに費やされることになります。研究時間を確保するために、総合研究所ができるサポートはないかを模索していきたいと考えます。

本報告書は、2022 年度の広島女学院大学学術研究助成に係る成果報告書です。多忙な校務をこなしつつ研究に励まれた教員の研究成果を報告させていただきます。ご高覧いただければ幸いです。

Ⅱ．2022 年度広島女学院大学学術研究助成
【研究概要報告書】

〔個人研究−一般〕

自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究―成長の可視化と促進―

人文学部　国際英語学科　准教授　中島 義和

1．研究の目的

学生（児童・生徒）が自ら成長を感じることができ、それを表現することで可視化され、さらに次への学びを駆動させる動機となる授業プログラム・コンテンツの構想・開発・実践・省察を本研究の目的とする。

2．研究方法

本研究は、学生の学習への動機付けを高めることを目指す授業開発と実践の第一年次である。学生の実態やニーズ、変化や成長を探るために、学生へのプレ・ポスト質問紙調査による変容の見取り、授業における取り組みや成果物の分析、抽出研究対象者への面接調査を行い、それを反映した授業プログラムやコンテンツを構想し、実践する。また、授業の創り手である教師への面接調査も実施する。「3.研究経過と概要」に示した３つの小課題【１】～【３】へのアプローチを通して、本課題を探究する。

3．研究経過と概要

各小課題について、下記の通り研究を進めた。成果発表の欄には、「4．研究成果の公表発表」に示した、各小課題に関連する学会口頭発表や論文等を記号で示した。

<table>
<tr><th>小課題</th><th>主な研究対象</th><th>研究内容</th><th>成果発表</th></tr>
<tr><td>【１】英語科教員志望学生および若手教員にみられる意識変容と成長に関する研究</td><td>「英語科教育法」受講学生、英語科教員、小中高の英語科の授業</td><td rowspan="3">・関連担当科目における学生への質問紙プレ・ポスト調査と結果分析
・小中高教員（30 名程度）への面接調査と学校訪問・授業観察、共同研究の実施（夏と春のフィールドワーク実施）
・「地域連携文化セミナー」「英文法Ⅱ」「英語科教育法」「キャリア・スタディ・プログラム」の各科目の授業構想・実践・省察、学生の成果物の見とり、抽出学生の面接調査実施
・学会発表８本
・論文執筆４本
・MISC 執筆５本 等</td><td>教職・教師
A-①、A-⑥、A-⑧、B-⑩、B-⑪</td></tr>
<tr><td>【２】学力多様性への対応を志向する第二言語習得論に基づいた英文法授業開発研究</td><td>「英文法Ⅱ」受講学生、英語科教員、小中高の英語科の授業</td><td>英文法・英語教育・授業づくり
A-①、A-②、A-③、A-④、A-⑥、B-⑨、B-⑩、B-⑪</td></tr>
<tr><td>【３】大学におけるアクティブラーニング型活動に関する実践研究</td><td>「地域連携文化セミナー」等受講学生、中高教員、教科等横断的・協働的課題解決型の授業（英語科を柱として、総合的な学習の時間や特別活動も視野に入れて）</td><td>AL・教科等横断・協働的課題解決
A-②、A-③、A-④、A-⑤、A-⑦、B-⑨、B-⑩、B-⑪、B-⑫、</td></tr>
</table>

4. 研究成果の公表

研究主題の鍵でもある「成長」を核に、小学生から大学生、教師を対象に、教科・領域等を横断する視点で研究を進め、それらを学会の性質等に合わせて発表するようにした。

A) 学会口頭発表および論文集等

①中島 義和、「新年度、新たな気持ちで 英語教育を構想する～実践と評価の視点から～」、関東甲信越英語教育学会 令和４年度５月月例研究会 2022 年 5 月 14 日、オンライン開催／研修企画委員会報告『KATE Newsletter（関東甲信越英語教育学会編集委員会発行）』No.116、p.18

②中島 義和、「サイレントアクティブラーニングー国語科の学習プロセスを英語科物語教材学習に適用する試みー」、中国地区英語教育学会 第 53 回大会 2022 年 6 月 25 日、オンライン開催

③楠見 友輔・桐山　瞭子・中島 義和・藤枝 真奈、「ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性を探る」、日本教育方法学会 第 58 回大会 2022 年 10 月 2 日、山口大学

④中島 義和・寺本 誠、「協働的な課題解決の力を培う教科等横断的なカリキュラムの開発ー英語科の視点からー」、日本教科教育学会 第 48 回大会 2022 年 10 月 9 日、愛媛大学／『日本教科教育学会第 48 回全国大会論文集』 pp.177-178

⑤寺本 誠・中島 義和、「協働的な課題解決の力を培う教科等横断的なカリキュラムの開発ー社会科の視点からー」、日本教科教育学会 第 48 回大会 2022 年 10 月 9 日、愛媛大学／『日本教科教育学会第 48 回全国大会論文集』 pp.179-180

⑥中島 義和「学生の学びへの動機づけを促進する教師の工夫ー英文法の授業における試みー」、日本教育実践学会 第 25 回研究大会 2022 年 11 月 19 日、佛教大学／『日本教育実践学会　第 25 回研究大会 論文集』 pp.34-35

⑦中島 義和「成長の可視化を目指す保育体験カリキュラムの試行ー言葉を紡ぐことを中心としてー」、中国四国教育学会 第 74 回大会 2022 年 12 月 4 日、香川大学

⑧中島 義和「教職志望学生による語りでのリフレクションを通した成長の可視化の試みー模擬授業実習での経験を核としてー」、日本教師学学会 第 24 回大会 2023 年 3 月 19 日、日本赤十字広島看護大学／『日本教師学学会 第 24 回研究大会 発表要旨集』pp.29-30

B) 論文発表

⑨中島 義和（2023a）「ディープ・アクティブラーニングを創出する授業デザインー教科等横断的な視点で『読み深め』のタスクモーティベーションを考えるー」『広島女学院大学論集』第 70 号、pp.1-18

⑩中島 義和（2023b）「エスノグラフィーの手法を用いた授業研究の試みーM. Agar による『リッチポイント』の概念を援用してー」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第 26 号、pp.1-20

⑪中島 義和（2023c）「『ノシアック』プロセスを意識したカリキュラム構想と実践ー英語科の授業と総合的な学習／探究の時間・特別活動をつなげる視点でー」、『広島女学院大学人文学部紀要』、第４巻、pp.31-54

⑫中島 義和（2023d）「成長の可視化を目指す保育体験カリキュラムの試行ー言葉を紡ぐことを中心としてー」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM 版）第 68 巻、pp.378-383

〔個人研究-一般〕

認知機能低下を防ぐ食品栄養素の機能評価システムの構築と病態制御法の探索

人間生活学部 管理栄養学科 特任教授　野間隆文

1.研究目的

認知症の克服と健康寿命の延伸を図るために、長寿食の中で共通する栄養素成分(レスベラトロール・アピゲニン・スペルミジン)が神経細胞の分化や生存に与える影響を調べる。その結果を認知症の発症予防や制御法の開発に繋げる。

2.研究計画

[ステップ1] 神経系細胞株を用いた神経細胞軸索伸長モデルの準備

2022年度に、神経突起伸長活性を有する神経系細胞株を用いて、酸化ストレス障害を用いたAD型神経細胞障害モデル系を構築する。

[ステップ2] AD型神経細胞障害モデル系の構築

認知症に対して病気の進行抑制効果があると言われている推奨食の中の食品栄養素をその培養モデル系に添加し、神経突起伸長阻害、細胞死に対して阻害・抑制効果を検討する。

[ステップ3] AD型神経細胞障害モデル系への食品栄養素の添加による効果評価

Aβ42存在下において食品栄養素の特性や神経保護効果のメカニズムの解明を行う。

3.結果

[ステップ１] 神経系細胞株を用いた神経細胞軸索伸長モデルの準備

3 種類の細胞株（PC12 細胞、SH-SY5Y 細胞、Neuro-2a 細胞）の培養特性を調べた結果、PC12細胞が神経系モデル細胞として最適であった。次に、PC12細胞にNGFを添加して神経分化を誘導し、神経分化の評価方法を検討した。細胞分化の定義として、伸長した神経突起の長さが細胞体の長さ以上のものであることとした。未分化の細胞の例として、点線枠で囲ったものを表示した。神経分化のポジィブコントロールとして、PC12細胞にNGF（10～200ng/mL）を添加し、神経突起の伸長、分化細胞数の状況を調べた。その結果、いずれの濃度においても、添加後培養7日後に分化のピークを確認した。また、PC12細胞はNGF20ng/mLで、分化した細胞数、すなわち分化度が最も高いことを認められたことから、以後の実験では、20ng/ mLのNGFをポジィブコントロールとして用いることにした。

[ステップ2] AD型神経細胞障害モデル系の構築

AD型神経細胞障害モデルとして、アルツハイマー病で原因の１つとして考えられている酸化ストレス障害をPC12細胞に与え、その感受性を検討した。その結果、PC12 細胞は、低濃度(100～400μM)では生存するものの、800μM の濃度では、ほとんどの細胞(80%～90%)が死細胞となり、1000μM の濃度では全てが死細胞となった。

[ステップ3] AD型神経細胞障害モデル系への食品栄養素の添加による効果評価

健康長寿食の中で共通する栄養成分として、ポリフェノール２種類（レスベラトロールとアピゲニン）とポリアミン（スペルミジン）を選抜し、これらの3 種類の栄養素が神経細胞機能の保護・増進にどのように影響するかを検討した。各濃度で神経細胞に与える効果を調べると共に、酸化ストレスの存在下で神経細胞へ与える影響を調べた。その結果、レスベラトロールでは、分化誘導能・抗酸化能、そして増殖、生存においても効果があることが確認できた。特に、至適な酸化ストレスの存在下では、レスベラトロールは神経分化

を促進する結果を得た。アピゲニンには、レスベラトロールに比べて弱いものの生存、分化において効果があることが確認できた。スペルミジンには、生存において効果があることが確認できた。

4. 研究総括

長寿食に含まれる栄養素成分を用いて、モデル神経細胞の増殖性、分化誘導能力、生存・酸化ストレスへの抵抗性に与える影響を検討した。レスベラトロールは単独で神経分化を誘導すること、酸化ストレスに対して、神経保護作用を有するとともに、神経分化促進作用を有する事が分かった。適度な酸化ストレス存在下では、神経分化誘導を促進した。今後、アルツハイマー型認知症のモデル系に、アルツハイマー病原因物質 $A\beta_{42}$ を加え、生じる酸化ストレスの状況をモニターしながら、食品栄養素の効果評価やメカニズム解明に向けて検討し、その効用について明らかにしていきたい。

〔個人研究−一般〕

Attitudinal Response and Productive Network Knowledge Assessment of using Virtual Reality in a Second Language Acquisition Environment.

人文学部　国際英語学科　助教　Felix David

This year was the year that I was able to share the results of my research on Virtual Reality. I was able to travel abroad and join both national and international conferences.

I was accepted to attend the “International Conference on Educational Technology, Learning and Social Science” in Hanoi on the 8th and 9th of August 2022 and as well as the International Conference of Education, Research and Innovation (ICERI-2022). To be honest, these conferences were smaller than expected and I wasn’t able to publish my research.

I can happily report that I won a CERTIFICATE OF BEST PRESENTATION AWARD ICALLE 2022: XVI. It was an international conference on advanced linguistics and language education where I could present my “outstanding work” entitled Assessing Students’ Attitudinal Response towards the Use of Virtual Reality in a Mandatory English Class at a Women’s University in Japan. This ICALLE 2022 conference was held in PARIS, FRANCE on December 29-30, 2022.

WASET International Science Council is currently reviewing the research paper I submitted at the ICALLE 2022 conference. Last week I was asked to do minor corrections in order to be selected to have my research published in their science magazine.

〔個人研究−一般〕

転写因子の転写活性非依存的な天然変性タンパク（IDP）としての新機能

人間生活学部 管理栄養学科 准教授 土谷 佳弘

【目的】

NF-κB（サブユニット RelA と p50 の二量体）はサイトカインなどの発現を制御する重要な転写因子であり、その活性は IκB キナーゼ β（IKKβ）により制御されている。腫瘍壊死因子（TNFα）などの炎症性サイトカインが TNFα 受容体に結合すると、IKKβ の活性化が誘導され、最終的に活性化された NF-κB はさまざまな炎症や発がん過程に関わる遺伝子発現を誘導する。

がん抑制タンパク質（p53）は通常ではユビキチンリガーゼ（Mdm2）により分解され、タンパク質量が低下している。しかし、DNA の損傷や紫外線、放射線などの遺伝毒性ストレスに応答し、p53 が活性化される。活性化した p53 は傷害された細胞の細胞周期の停止やアポトーシスを誘導し、細胞のがん化を抑制すると考えられている。

先行研究から、転写活性非依存的に RelA の転写活性化ドメイン（TAD）が IKKβ の活性化を抑制していることが示唆された。転写因子の多くが TAD 領域を持ち、p53 にも保存されている。本実験では、相反する作用を持つ RelA と p53 に着目し、p53 の TAD の機能について解析を行った。

【方法】

HepG2 細胞に野生型 p53 と転写活性がない p53 欠損変異体を導入し、IKKβの脱リン酸化の変化をウエスタンブロッティングや免疫沈降法を用いて解析を行った。

【結果】

p53 変異体による NF-κB 活性の変化

IKKβ と転写因子 p53 を細胞内へ導入し、ルシフェラーゼ解析で vector と p53 による NF-κB 活性化の変化を比較した。p53WT は、NF-κB の活性化を有意に抑制することが確認された。続いて、TAD 領域は立体構造を持たない天然変性領域であり、細胞内情報伝達のハブタンパク質としての機能に着目した。p53（1-101）TAD 領域が NF-κB の活性化を抑制するか、vector と p53 のそれぞれの領域で比較した。p53 の TAD 領域である 1-101、DNA 結合領域である 102-292、四量体形成領域（TD）と塩基性領域（BD）である 293-393 の 3 つに領域において、NF-κB の活性化が抑制されるかルシフェラーゼ法で解析を行った。結果として、p53TAD を発現させると vector と比較して、NF-κB の活性化が有意に抑制されることが明らかとなった（図 2）。

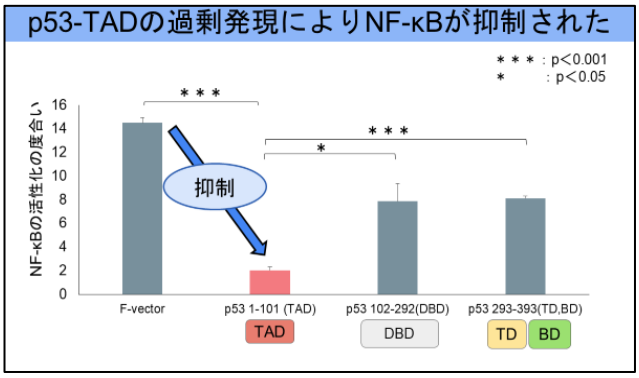


図 1　p53TAD により NF-κB 活性が抑制される

F-p53WT と F-p53（LLL/FFF）変異体の比較

TAD 領域に存在する NF-κB の活性化の抑制に関与する LxxLL モチーフは p53 の TAD に保存されている。LxxLL モチーフのアミノ酸配列の Leu 450、Phe 474、Phe 542 すべてフェニルアラニン（F）に置換した p53（LLL/FFF）（TAD 点変異体）を用いて解析を行った。

結果として、p53TAD 点変異体は p53WT でみられる NF-κB の活性化の抑制効果が有意に減弱することが明らかとなった（図 2）。

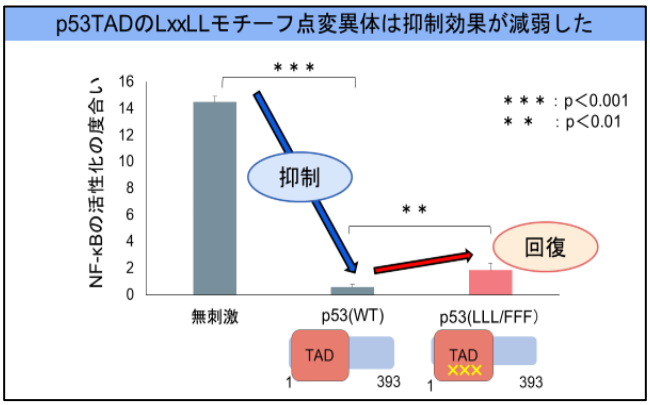


図 2　p53TAD の点変異体は抑制効果が減弱する

【考察】

本実験では、相反する作用を持つ RelA と p53 に着目し、p53 の TAD の機能について解析を行った。p53 でも NF-κB の活性化が抑制されていることが判明した。
さらに、NF-κB の活性抑制に関与する p53 のタンパク質構造領域を探るために、p53 の全長を p53（TAD）、p53（DBD）、p53（TD、BD）のドメインごとに分けて解析を行った。p53（DBD）、p53（TD、BD）では、NF-κB の活性化が抑制されないのに対して、p53-TAD では NF-κB の活性化が顕著に抑制されていることが判明した。よって、p53-TAD は転写活性非依存的に NF-κB 活性化を抑制する働きを持つことが示唆された。

p53-TAD は IKKβ のリン酸化を直接抑制することによって、NF-κB の活性化を抑制することが予想され、LxxLL モチーフが IKKβ のリン酸化抑制に関係していることが示唆された。今後は IKKβの不活性化にはホスファターゼである PP2A が関与するが、p53 がどのように IKKβの脱リン酸化に関与しているのか未解明である。今後は p53 と PP2A の結合に着目して IKKβの脱リン酸化機構の明らかにする必要がある。

【成果の公表成果】

本研究成果は 2023 年度に学術雑誌に投稿する準備を進めている。

〔個人研究-一般〕

角筆文献を活用した授業の構築と教材用マニュアルの作成について

人文学部　日本文化学科　教授 柚木靖史

１．研究の目的

角筆文献とは、墨筆を使わず、箸のような棒の先端を紙面に押し付けて掻いた線によって文字や符号、絵などが書き込まれた文献をいう。角筆文献は、日本に伝存する文献文化財であり、様々な情報を今に伝える貴重な文字資料である。例えば、角筆文献に記された角筆文字の情報は、地域の方言の歴史をたどるための重要な資料となる。しかし、角筆文献は、現在消失しつつある。資料自体を見栄えよく保存するために、紙面に圧力をかけて皺を伸ばすという製本作業などが消失の原因である。角筆文字を残す製本方法があるにもかかわらず、このような製本作業が行なわれる理由は、角筆文献が、図書館や資料館の職員に知られていないことによる。

角筆文献を守り伝えて行くためには、角筆文献を理解し、正しく扱える人材を育てる必要がある。この点、大学の授業が重要となるが、現在、角筆文献を活用した授業は行われていない。角筆文献は、文字が目に見えにくいという特殊な文献であるだけに、角筆文献調査マニュアル（テキスト）が無いと、授業を行うことは難しいであろう。そこで、本研究は、角筆調査を自らの授業経験に基づき、今までの問題点や成果を整理しつつ、マニュアルを作成することを目的とする。

２．研究成果の概要

（１）口頭発表
角筆文献調査マニュアルの作成に向けて―角筆文字の見つけ方―
（第４回 TC・リデザイン学術研究会　10 月 15 日）
（２）論文
・柚木靖史「角筆文献調査マニュアルの作成に向けて―角筆文字の見つけ方―」（『第４回テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会発表論文集』p14－15　2022 年 10 月）
・柚木靖史・近藤友子・石田泰子「角筆文献研究が抱える課題と展望―教育的活用法と電子的記録法」（『広島女学院大学論集』第 70 集(電子版第 10 号　2023 年２月)
（３）角筆研究例会の実施（2022 年度開催分）
第 25 回角筆研究例会（４月 22 日）/第 26 回（5 月 20 日）/第 27 回（6 月 27 日）/第 28 回（７月 15 日）/第 29 回（7 月 30 日）/第 30 回（8 月 6 日）/第 31 回（9 月 16 日）/第 32 回（10 月 7 日）/第 33 回（10 月 24 日）/第 34 回（11 月 11 日）/第 35 回（2023 年 12 月 9 日）/第 36 回（2023 年 1 月 28 日）/第 37 回（2023 年 2 月 15 日）/第 38 回（2023 年 3 月 4 日）
（４）角筆および角筆文献調査
〇頼山陽史跡史料館における象牙角筆・竹製角筆の閲覧（2022 年 7 月 30 日（土））
〇金光図書館における角筆調査（2023 年 2 月 25 日（土））

３．研究の今後について

今後は、本研究の成果をもとに、さらに現在作成しつつあるマニュアルの細部を検討し、全国初となる角筆文献調査マニュアルを完成させたい。角筆文献は、郷土資料を学ぶための教材として、有効である。引き続き、角筆調査を取り入れた授業を行いながら、より効果的で魅力のある授業内容や授業方法を構築していきたい。

〔個人研究-一般〕

中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究

人文学部　日本文化学科　専任講師 小松 明日佳

1　研究目的

「中世王朝物語」と呼ばれる鎌倉期を中心とする物語群は、社会的認知度が低く、文学史を構築する一部でありながらも、これまで研究対象とされることが少なかった。基礎研究、特に索引が十分に整備されておらず、研究を行う上での障害となっている。中世王朝物語においては、先行する『源氏物語』の影響が特に強いと考えられており、『源氏物語』の受容は、中世王朝物語の研究における最大ともいえる観点になっている。

そこで本研究では、中世王朝物語の研究を推進するために、『源氏物語』の受容という観点を踏まえ、『源氏物語』の語彙を基にした中世王朝物語の索引を作ることを目指す。『源氏物語』の影響を語彙において明らかにする索引は、中世王朝物語の研究を推進する一助になると考えられる。作成した索引を活用することによって、中世王朝物語を総体として捉えることが可能となり、その研究成果は索引の有用性を示すことにも繋がると考えている。

2　研究方法

索引の作成においては、『中世王朝物語全集』（笠間書院、1995～刊行中）を底本とする。索引の見出し語としては、報告者によるこれまでの研究の過程で中世王朝物語における『源氏物語』受容として特に重要であると判断された語を取り上げる。具体的には、「癖」「らうたし」「気高し」「愛敬」の 4 語である。上記の 4 語を取り上げた後も、中世王朝物語において『源氏物語』受容の観点から重要と考えられる語を順次取り上げる予定である。その際、参考として、『源氏物語大辞典』（秋山虔・室伏信助編、角川学芸出版、2011）を用いる。

また、上記 4 語を用いた作品の考察も行う。考察の観点としては人物造型を取り上げる。これは、人物造型が『源氏物語』受容の中でも物語の核として特に重要であるためである。索引を活用し、中世王朝物語を総体として捉えることを目指す。

3　研究経過

索引の作成については、現在、『中世王朝物語全集』の本文テキストデータを作っている。作品の考察については、見出し語にする予定である「癖」を抽出し、分析を行っている。「癖」という表現は、報告者によるこれまでの研究の過程で中世王朝物語における『源氏物語』受容として重要な表現であると判断されたものである。

4　研究成果の公表

索引については、公表先は未定だが、学術雑誌に投稿する予定である。学術雑誌への掲載により、索引は広く利便性をもたらすものとなると考える。作品の考察については、前述の「癖」という表現について、学会で発表するとともに、論文として学術雑誌に投稿する予定である。

〔個人研究-一般〕

デジタルライブラリーを活用した多読活動による語彙力とリーディングに対する積極性の向上調査研究および促進と可視化

人文学部　国際英語学科　専任講師　**大崎 美佳**

1. 研究の目的

学生が英語力を高めるための方法の一つに多読法がある。多読法とは、言語能力向上を目的に、自分に読めるレベルの英語で書かれた文章を大量に計画的に読むことであり、自分で面白いと思える本を選び、辞書を使わずに推測しながら読むことで読解力と素早く読む力をつける方法である。

コロナ禍において一昨年より X-Reading というデジタルライブラリーを使った多読活動を授業課題として取り入れる中、今年度は特にこの X-Reading を全学共通教育である「基礎英語」の授業の１つの柱として位置づけることを踏まえ、その成果を詳しく検証し可視化することで今後のより効果的な活用方法に活かすことを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、学生が X-Reading を始める学期初めと学期末に５つのレベルの語彙テストを受け、その結果を各学期記録し分析する。また、学生の学習意欲を高めるためには、英語を読む楽しさや英語力が向上しているという実感を持つことが大切である。そのため、学生自身が X-Reading による自分の語彙力やリーディングに対するメンタル面の変化を確認する作業を行い、テスト結果と質問調査の両方を研究対象として、データの分析を行う。

また、テスト取り組み時間の変化や X-Reading での獲得文字数とも照らし合わせて、様々な視点からその相関関係を調査する。それにより、より詳しく読書量と多読法、その意義と学生の成長を見とることができる。その結果を踏まえて、さらに効果的な X-Reading の活用法を見出し授業に活かしていくことを目指す。

3. 研究経過と概要

前期と後期の学期初めと終わりに、Paul Nation (1993) により形成され、それを基に作られた日英バイリンガル用レベル別語彙テスト (McLean and Kramer, 2015) を、国際英語学科の学生４２人（１年生１９人と２年生２３人）と、英語を専攻していない他学科の１年生６３人に実施した。また、リーディングに対するメンタル面の変化も重要であると考え、Yamashita (2004) の読みに対する態度の質問を基にした調査を前期の学期末から実施した。

前期の研究データは、残念ながら、倫理委員会の審査が９月であったため使用することができず、研究は後期および来年度の調査データを分析し、考察を進めていくこととなった。しかしながら、前期のデータを８月に分析したところ、特に X-Reading を初めて行った１年生については、明らかな語彙力およびメンタル面での向上が見られた。

4. 研究成果の公表

2022 年度の研究成果については、語彙テストのデータ分析を基にした成果に絞り、発表申し込みを行った。次年度は、メンタル面の変化やテスト取り組み時間の変化、X-Reading での獲得文字数など、さらに広い視点から相関関係を明らかにしていき、研究を発展させていく予定である。

〔個人研究-一般〕

A longitudinal mixed methods study of L2 motivation in a Japanese undergraduate English program: developing intervention strategies and support systems.

人文学部　国際英語学科　准教授　ロバート・ドーマー

The motivation of learners is widely recognized as being an important aspect underlying success and failure in EFL/ESL (as well as other foreign language learning). As such, it is a major concern for learners, teachers, course administrators and institutions- in other words, it is an important object of concern and study at every level of education (e.g. Ushioda, 2010, Dörnyei and Ushioda, 2021. Throughout the last two decades, there have been, it is fair to say, major changes in the understanding of, and research approach to, L2 motivation. Some salient aspects of this change are relevant to the current research proposal. First, developments in the wider fields of educational psychology and psychology have been slow to 'filter down' into L2 teaching and research contexts. Another trend is the increasingly complex models being applied, generally, aimed at incorporating more context and individual factors into the assessment of L2 motivation. From early socio-educational theories (Gardner, 1985), Dörnyei's earlier work on motivational components, task motivation, the process-orientated model, and more recently the 'L2 motivational self' system (e.g. 2005) and 'directed motivational currents' (e.g. Zarrinabadi et al., 2019), as well as periodic borrowing from seemingly fruitful approaches in wider educational psychology and organizational psychology, the landscape is one of progress but also complexity and challenges. Each of these approaches has built on perceived weaknesses or missing elements, to shed light on the complex interplay of various personal, contextual and temporal factors (among others)　However, as Papi and Hiver (2020) acknowledge, while all of these approaches have, in their own way, contributed to the acknowledgement that learners, and learner motivation, must be understood "as whole persons situated within a broad and dynamic social context" (2020, p.209), they all fall short in that they essentially model simple, linear links between variables and motives. A major theoretical underpinning of this research, then, is the intention to bring to bear a wide-ranging toolbox of theoretical approaches, in exploratory initial stages, in order to determine, and later, apply, appropriate models/constructs/methods.

Another important point of recognition, touched on above, is the importance of context. If treating the individual learner as a static monolith is now considered oversimplifying, then of course, each class, course, curriculum, institution, and wider (usually, country) context is also unique. English education in Japan is a notoriously challenging area　(e.g. Apple, Da Silva and Fellner, 2013), and even though the context for this proposed research is for English majors, the relatively low level of many learners

and poor achievement trajectories (in terms of standardized tests) of some sections of the students means that any action research aspirations (i.e. the wish for this research to culminate in reliable and actionable changes/interventions) can only achieved through exploratory inquiry. Thus, rather than assuming the usefulness/applicability of some given model, it is important that qualitative and quantitative research, piloting, and exploratory aspects be combined in a way that allows for the unique motivational characteristics of a learner body to emerge. This will, undoubtedly, require various stages of both qualitative and quantitative research, and the identification of student types and trajectories, which can then become the subject of interview-based, longitudinal complex dynamic systems approaches. This study will make a genuine contribution to uncovering not only the specific characteristics to L2 motivation in Japanese undergraduate English courses, but explore the key issue of effective interventions, while at the same time providing important longitudinal and multi-theoretical approaches to a key area of L2 motivation studies.

Activities, results, presentations, and publications to date include:

1. Initial L2 motivation profile data for HJU participants collated, and published in HJU journal
2. An extended participant study questionnaire was designed and implemented (58 participants). That will drive the next stage of the research project.
3. Preliminary results were published in 広島女学院大学人文学部紀要, March 2022; additional publication March 2023.
4. Presentation at IAFORE IICE/IICAH 2023.

Publication

Designing, Implementing and Assessing a System of Reward Certificates in an L2-Content Hybrid Undergraduate Program at a Japanese Women's University

広島女学院大学人文学部紀要 (1) 1-14 2022 年 3 月

Understanding the Importance of Role Models in L2 Motivation: Preliminary Results from a Mixed-Methods Study

広島女学院大学人文学部紀要 4 1-14 2023 年 3 月

Presentation

Appraising Asset-based Community Development as ESD: Global Village 2019 Case Study IICE, HA, United States. January 5th-8th, 2023.

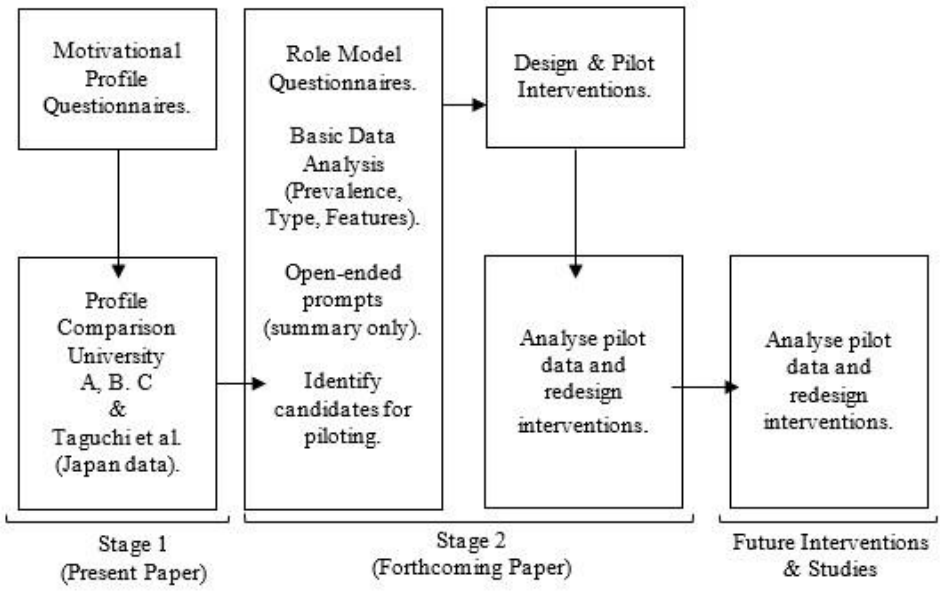
Factor	Scores (1-6)	Taguchi et al. (Japan only)
Criterion measures (1,2)	4.08 (0.96)	3.29-4.26
Ideal L2 Self (3,4)	3.84 (1.10)	2.90-4.45
Ought-to L2 Self (5,6,7)	2.54 (1.2)	1.25-1.42
Family influence (8, 9,10, 11)	3.59 (1.29)	2.0-3.41
Instrumentality- promotion (12,13,14)	4.60 (1.02)	4.2-5.08
Instrumentality- prevention (15,16,17)	3.89 (1.03)	2.91-4.04
Attitudes to learning English (18,19,20,21,22)	4.6 (1.1)	3.65-4.32
Cultural interest (23,24 25, 26)	5.14 (0.92)	3.73-4.69
Attitudes to L2 community (27,28,29,30,31,32)	5.2 (1.0)	4.52-4.86
Integrativeness (34,35,36,37,38,39,40)	4.5 (1.01)	4.06-4.84

Table 1: Questionnaire Factor Items

Initial motivational profile report (2022 publication)

Figure 1

Study Design Outline



2023 Design

Table 1

Study Participants

	Group A		Group B		Group C		Total	
Participants	77		52		27		156	
Gender	m	f	m	f	m	f	m	f
	71	6	49	3	0	27	119	37
Age	M = 19.7 SD = 1.40		M = 18.9 SD = 0.78		M = 19.7 SD = 1.22		M = 19.4 SD = 1.25	
Majors	Social Sciences		Science & Engineering		English & EMI			
Level	A2-B1		A2-B1		A2-B2			
exc. outliers	*Mdn* A2		Mdn A2		Mdn B1			

Participant data

Table 2

Motivational Profile by Group

Factor	Group A	Group B	Group C	Japan*	AC:Japan* *SD/M; p*
Criterion measures	3.55 (1.02)	3.92 (1.35)	4.08 (0.96)	3.29-4.26	3.83/0.15; 3.71/0.31: *0.073*
Ideal L2 Self	3.46 (1.08)	3.49 (1.23)	3.84 (1.10)	2.90-4.45	3.48/0.15; 3.70/0.31: ***0.06***
Ought-to L2 Self	2.34 (0.98)	2.57 (1.16)	2.54 (1.20)	1.25-1.42	3.80/0.15; 3.84/0.30: *0.486*
Family influence	3.09 (1.02)	3.12 (1.10)	3.59 (1.29)	2.0-3.41	2.44/0.07; 1.34/0.04: ***<0.001***
Instrumentality-promotion	4.20 (1.02)	4.51 (1.07)	4.60 (1.02)	4.2-5.08	4.38/0.11; 4.60/0.32: ***0.0031***
Instrumentality-prevention	3.90 (1.05)	3.81 (1.38)	3.89 (1.03)	2.91-4.04	3.86/0.03; 3.45/0.35: ***<0.001***
Attitudes to learning English	4.37 (0.96)	4.14 (1.29)	4.6 (1.11)	3.65-4.32	4.38/0.14; 4.04/0.17: ***<0.001***
Cultural interest	4.93 (0.97)	5.14 (1.37)	5.14 (0.92)	3.73-4.69	5.03/0.05; 4.20/0.31: ***<0.001***
Attitudes to L2 community	4.94 (1.10)	4.68 (1.05)	5.2 (1.00)	4.52-4.86	4.84/0.11; 4.68/0.10: ***<0.001***
Integrativeness	4.28 (0.81)	4.28 (0.91)	4.5 (1.01)	4.06-4.84	4.39/0.06; 4.44/0.22: 0.204

*from Taguchi et al. , 2009

Ⅲ. 2022 年度広島女学院大学学術研究助成
【交付一覧】

研究種目	研究代表者氏名	研究題目	助成期間	助成決算額
個人研究（一般）	中島　義和	自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究―成長の可視化と促進―	2022-2023	499,872
	野間　隆文	認知機能低下を防ぐ食品栄養素の機能評価システムの構築と病態制御の探索	2022-2023	499,964
	Felix David	Attitudinal Response and Productive Network Knowledge Assessment of using Virtual Reality in a Second Language Acquisition Environment.	2022-2023	500,000
	土谷　佳弘	転写因子の転写活性非依存的な天然変性タンパク（IDP）としての新機能	2022-2023	500,000
	柚木　靖史	角筆文献を活用した授業の構築と教材用マニュアルの作成について	2022-2023	330,470
	小松　明日佳	中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究	2022-2023	500,000
	大崎　美佳	デジタルライブラリーを活用した多読活動による語彙力とリーディングに対する積極性の向上調査研究および促進と可視化	2022-2023	452,989
	Robert Dormer	A longitudinal mixed methods study of L2 motivation in a Japanese undergraduate English program: developing intervention strategies and support systems.	2021-2022	294,000
計				3,577,295

Ⅳ. 2022 年度科学研究費助成事業
【交付一覧】

本紙上では研究代表者への交付についてのみ報告し、研究分担者として学内外から受けた配分額については記載しない。

研究種目 審査区分	研究代表者氏名	研究題目	研究期間	直接経費 間接経費
基盤研究(B) 一般	福田　道宏	近世宮廷絵師の画系、出自的背景と宮廷社会に関する基礎研究	2020-2024	1,200,000 360,000
基盤研究(C) 一般	小林　文香	住まい手の主体的な住み継ぎや地域環境の警鐘をめざした生活知共有プログラムの開発	2018-2022 ※1	0 0
	真木　利江	平和公園における建築とランドスケープデザインの記念表現の展開	2021-2023	800,000 240,000
	妻木　陽子	観光地での実現可能な食物アレルギー対応　～ユニバーサルツーリズムの現状と課題～	2021-2024	700,000 210,000
	中村　勝美	イギリスの大学におけるチュートリアルの確立と変容に関する歴史的研究	2022-2025	700,000 210,000
	森保　尚美	舞踊の模倣から音楽を複合的に知覚・感受する音楽科授業デザインの開発	2022-2025	500,000 150,000
	出雲　俊江	明治～昭和戦前期における短歌教育の研究 －学習者の言葉とその交流を観点として－	2022-2024	400,000 120,000
若手研究(B)	妻木　陽子	食物アレルギー対応に関する地域教育プログラムの構築～社会的ニーズの把握から～	2017-2022 ※1	0 0
若手研究	石長　考二郎	ヒトの嗅覚に起因した情動変化に伴う食物嫌悪出現の特徴とメカニズム	2020-2022	900,000 270,000
	戸田　慧	アーネスト・ヘミングウェイの文学における「動物性愛」に関する一次資料研究	2019-2022	900,000 270,000
			計	6,100,000 1,830,000
			直接経費・間接経費　合計	7,930,000

※1 令和 4（2022）年度は研究期間延長のため未使用額（繰越金）のみ使用し助成金交付なし。

Ⅴ．　関係規程等

【2023 年 8 月 1 日現在】

広島女学院大学総合研究所規程　2031～2032-1-

広島女学院大学公倫理審査委員会規程　2091～2091-3-

広島女学院大学 遺伝子組換え実験安全管理規程　2091-11～2091-34

広島女学院大学利益相反管理指針　2092～2092-2-

広島女学院大学利益相反管理施行細則　2092-1-1-

広島女学院大学「人を対象とする医学系研究」に関する倫理指針　2092-2-1～2092-2-4

広島女学院大学学術研究助成規程　2501～2506

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程　2521～2522

広島女学院大学学会特別助成規程細則　2531～2532

広島女学院大学特別専任研究員規程　2541～2542

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規程　2551～2554

広島女学院大学受託研究規程　2561～2562

広島女学院大学における研究費の取扱いに関する規程　2571～2574

広島女学院大学における科学研究費補助金及び学術研究助成基金助成金の執行・管理に関する取扱要領

※規程の詳細に関しては、広島女学院大学総合研究所 HP(https://www.hju.ac.jp/souken/top.html)をご確認ください。

編集委員

三 木　　幹 子　　総合研究所所長（代表）
磯 部　　祐 実 子　　総合研究所委員
足 立　　直 子　　総合研究所委員
真 木　　利 江　　総合研究所委員
佐　藤　　努　　総合研究所委員
加 藤　　美 帆　　総合研究所委員

広島女学院大学総合研究所年報　Vol. 27

2023 年 8 月 1 日発行　©
〔非　売　品〕
編集代表　　三木　幹子
発行代表　　三谷　高康
発 行 所　　広島女学院大学総合研究所
〒732-0063　広島市東区牛田東四丁目 13-1
TEL ㈹082-228-0386